時代の最先端だった人工皮革の靴

シューフィル　城（たち）　一（いっ）生（せい）

1960年前後、皮革の相場が高騰し供給の不安定化が続き、10年20年後には皮革の絶対量が不足するとも噂されていた。一方で、技術革新の時代でもあり、国際的な新素材開発競争が起きていた。

デュポン・コルファムの概要を伝える業界紙の記事（東京靴通信、66年）

そんな中、巨大企業デュポン社が開発した人工皮革（マンメイドレザー）コルファムを用いた靴がアメリカで大ヒットしているというニュースが63年に伝えられ、翌64年にはコルファムの日本展開が大々的に始まる。市場調査、販売代理店の開設、靴メーカーへの製造ノウハウの供与など一気呵成に進められた。その動きに対抗して、65年には東洋レーヨン（現・東レ）ハイテラック、倉敷レーヨン（現・クラレ）クラリーノ、東洋ゴム工業（現・TOYOTIRE）パトラなど国内の素材企業が次々に独自の靴（甲革）用人工皮革を打ち出した。

高度成長で靴需要が急増し、反面で皮革の安定供給に不安を抱く靴業界は、突如現れた種々の人工皮革に熱い視線と大きな期待を抱く。皮革の代替え補完用である以上に、時代の最先端を行く話題の新素材であり、水に強い、軽い、手入れが簡単といった消費者へのアピールポイントも多い。さらに製造の現場での作業性、生産効率の良さも注目された。

国内の素材メーカーも次々に靴（甲革）用人工皮革を打ち出した

大手メーカーを筆頭に人工皮革靴の製造が急ピッチで始まる。流通段階でも、66年から素材メーカー、靴メーカー、小売店団体が協力して販売イベント、人工皮革靴まつりが開催され、 69年からは約900の有力靴店が参加する全国規模のイベントとなっている。新しい工業製品が次々生まれ、使い捨てられていく時代にあって、人工皮革靴は未来先取りの製品であった。

しかし、靴分野で人工皮革が脚光を浴びたのは短期間であった。過当競争による素材および製品価格の下落が起き、靴市場の成熟にともなう本物志向やファッション志向にそぐわぬ素材として、有力靴メーカーを中心に人工皮革離れが急加速する。やはり靴には天然皮革がイチバンだ、と。71年にはコルファムが撤退、75年には人工皮革靴まつりも終了。人工皮革は低価格商品、雨靴用、スエードやエナメル調のもの以外はほとんど使われなくなってしまった。

――以来40年以上、靴と皮革の相思相愛が続く。一方で、靴離れした人工皮革は、その後も研究開発が進み、時代のニーズを捉えた素材としてさまざまな産業分野と世界市場に販路を広げている。

多くのメーカーが人工皮革靴の生産を行った